

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2010 年 10 月 2 日

派遣者氏名（専門分野）	山口 真季子 （ 音楽学 ）
-------------	----------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	使用楽譜から見るアルトゥール・シュナーベルのシューベルト解釈
-------	--------------------------------

派遣期間

22 年 8 月 24 日 ～ 22 年 9 月 7 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	アメリカ	ワシントン	アメリカ議会図書館	

派遣先で実施した研究内容

本研究は、フランツ・シューベルト（1797-1828）のソナタを中心とするピアノ作品が広く演奏会で取り上げられるようになる契機を作ったとされるピアニスト、アルトゥール・シュナーベル（1882-1951）がシューベルトをどのように解釈していたかと言う点について、彼の楽譜への書き込みから調査しようとするものである。彼のシューベルト解釈に対する考察は、シュナーベルと彼を中心とするベルリン・サークルによって行われた、フランツ・シューベルト（1797-1828）再評価の実態を探ろうとする博士論文の構想において核となる部分である。

シュナーベルのシューベルト解釈については、これまでシュナーベル自身がシューベルトのソナタについて語った新聞記事や講演の記録、彼の残したピアノ作品の録音などから探ってきた。またシュナーベルは原典を重視して作曲家の意図を読み取ろうとした早い時期の演奏家であり、弟子に対しても信用のおける楽譜を比較して作品解釈に努めることを推奨したとされる。楽譜に記された一見不可解な指示に対しても、不用意に変更することなく作曲家の真意を探ることに神経を注いだ。シュナーベルのこうした態度はシュナーベルの弟子たちによる著作でも触れられているが、シューベルトのピアノ曲に特化した話は多くない。そこでそうした彼の作品解釈が具体的にシューベルトに対してはどのように行われているのか、これまで音源や言説から考察してきた彼のシューベルト解釈について楽譜への書き込みからはどのようなことが読み取れるかを調査した。

アメリカ議会図書館はアルトゥール・シュナーベル・コレクションおよびシュナーベル／ルギャレク・コレクションを所蔵しており、シュナーベル・コレクションには主にシュナーベル本人の作品、シュナーベル／ルギャレク・コレクションには、シュナーベルの弟子であり友人であったルギャレクが提供したシュナーベルに関連する楽譜、演奏会評、著作物が保存されており、その中にシュナーベルの書き込みがあるシューベルトのピアノ・ソナタやピアノ小品、連弾作品の楽譜も含まれている。

ピアノ・ソナタに関しては、イ長調 D959 の全般にわたり指使いやフレージング、強弱、タッチに関する書き込みが見られ、変ロ長調 D960、ト長調 D894 のソナタにはいくつか指使いの指示が

見られた。即興曲集 D899 および D935 と《楽興の時》D780 の楽譜にはより多くの指示があった。ルギャレク所蔵の楽譜はいずれも校訂版で、持参したシューベルトの旧全集（19 世紀末に刊行された楽譜で、当時入手可能な中で最もオーセンティックなもの）リプリント版と見比べると、シュナーベルがさまざまな箇所では旧全集の指示に従って訂正を加えていることが分かった。しかし旧全集の指示が全て忠実に写されているわけではなく、シュナーベル自身の解釈と思われるフレージング、アゴギクの指示もあった。これはシュナーベルが作曲家の意図を表現する上で必要と考えたものと思われる。またフレーズの長さが不規則な部分にローマ数字を書き入れて注意を促している場合も多く見られた。こうした書き込みはシュナーベルが音楽の構造をどのように捉えていたか、どのような部分に気を配っていたかを知る上で、重要な手がかりとなる。

同コレクションには、シューベルトの楽譜のほか同様にレッスンで使用されたと考えられるシューマンやブラームス、モーツァルトなどのピアノ曲の楽譜、シュナーベルがベートーヴェンのソナタの校訂を行った際に書き込みを行った楽譜や注釈のメモも保管されている。今回はこうした楽譜への書き込みを写真にとって持ち帰ることができたので、他の作曲家の作品に見られる書き込みも参照しながら、読み解きを進めたいと考えている。

### 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

本研究では、これまでシュナーベルや関係者の言説、録音から考察を進めていたシュナーベルのシューベルト解釈について、彼が演奏上の指示を書き入れたシューベルトの楽譜を調査することによって、その理解を深めることを当初の目的としていた。

アメリカ議会図書館所蔵の楽譜には言葉で書き込まれたものこそ少なかったが、彼の解釈を探る上で手がかりとなるようなフレージング、強弱、緩急、指使い等の書き込みを多く発見することができた。またそれをシューベルトの旧全集版と比較することによって、シュナーベルが原典に従っている部分、自身の解釈を加えている部分をそれぞれ明らかにできた。ただ他のピアノ作品に比べピアノ・ソナタについて、書き込みの見られる作品が少なかったことは残念であった。

また当初はさらにそれをシュナーベルの録音と比較することを計画していたが、他にもシューベルト以外の作曲家の作品やシュナーベルの演奏に対する批評など、今後研究の助けとなりそうな資料を見つけることができたため、それらの資料の記録を優先した。シューベルトの楽譜への書き込みと、シュナーベルの録音資料との比較は今後の課題としたい。

### 派遣後の研究発表の予定

今年 9 月末から 2 月にかけて、DAAD 奨学金（短期 1-6 ヶ月）を得てベルリン芸術大学音楽学コースで研究を進めることが決定しており、大学のゼミでの発表を予定している。また 2011 年 9 月にイタリアで開催予定のシュナーベル・シンポジウムにて発表の予定があり、その際に今回の研究成果を発表したいと考えている。